

第26期第8回常任理事会議事録

日時：6月26日 13時30分—17時45分

場所：気象庁 気象学会事務室（8階）

出席者：浅井 小倉 竹内 村山 藤谷 木田 村上
青木 安富 安成 佐藤 中村

議事

A. 報告事項

1. 各委員会報告

「庶務」

- ・1990年度事業報告を6月12日文部省に提出した。
- ・協力協賛等名義使用依頼 2件
- ・転載許可 1件

「会計」

- ・5月分の収支状況が説明された。
- ・1990年度の会計事務の問題点について、分析と改善策について説明された。

「天気」

- ・6月号の内容と7, 8月号の予定が紹介された。
- ・編集委員会報告
 1. 1991年度の新企画の状況
 2. 1992年度以降の企画

「気象集誌」

- ・Vol. 69, No. 4 掲載予定の論文6編が紹介された。

「気象研究ノート」

- ・171号の発刊が遅れているが、原稿は順調に集まっている。
- ・158号の「酸性雨」特集号は品切れとなっていたが増刷する。

「通信メディア」

- ・5月の着件数（190件）と内容の報告があった。
- ・気象学会パソコン通信に会員名簿を収録した。

「総合計画」

- ・地球惑星関連学会連絡会が発足した。連絡会へは当面総合計画理事が委員として参加する。参加学会は地震学会、地球電磁気・地球惑星

圏学会、日本火山学会、日本測地学会、日本地球化学会のほか日本岩石鉱物鉱床学会、日本鉱物学会、日本地質学会、日本海洋学会そして日本気象学会と併せて10学会である。

- ・勸学教育研究会から昨年に続いて、スーパーコンピュータ CPU 200 時間提供の申し出があり、希望者の募集及び選考等は昨年と同様に対処する。申し込みは締切は9月10日。

「IAMAP」

- ・オーガナイズをサンケイコンベンションに依頼した。
- ・「天気」に経過報告を掲載する。
- ・8月の IUGG で配布する IAMAP の案内を作成した。

「講演企画」

- ・春季大会でアンケートを行った結果、委員会の提案に対して好意的な意見が多かった。「天気」に掲載して会員の意見をもらい大会のあり方を検討する。
- ・来春の大会について、4会場にすることも含めて気象研究所で準備を始めている。

「教育と普及」

- ・夏季大学実施計画と進行状況の説明があった。
- ・講師の派遣について理事長から所属長に依頼文書を出すこととした。

B. 審議事項

1. 第7回常任理事会の議事録は一部修正の上承認された。

2. 会員の新規加入、退会について

個人新規加入 37名、団体新規加入 2

個人退会 5名、団体退会 3

退会者の氏名を「天気」に掲載することについての提案があり審議した結果、賛成少数で否決された。

3. IAMAP—93 の組織体制について

- ・組織委員会33名（実行委員会11名を含む）、募金委員会20名（1990年末発足）事務局6名の委員など案が提示された。今後さらに検討することになった。

4. ペーパーズの複製販売について

- ・気象研究所、日本気象協会及び当学会の3者で今後の取扱いについて協議の経過について中村理事から説明があり、審議の結果、第42巻4号をもって気象学会の事業としての販売を終了することが了承された。なお、43第1巻号から日本気象協会が当該事業を引継ぐ。

5. 委員の交替などについて

- ・気象集誌「アジアモンスーン特集」の編集委員会（任期：1992年3月まで）を組織することについて村上理事から提案があり承認された。
- ・気象集誌常任編集委員を1名追加すること及び後援企画委員会の委員交替について次の提案があり承認された。

記

気象集誌編集委員

追加 播磨屋敏生（北海道大学）

講演企画委員会

交替 新 隈 健一（数値予報課）

前 万納寺信崇（数値予報課）

6. 1991年度「山本・正野論文賞」候補者について

- ・選定委員会委員長廣田理事からの推薦を受けて審議の結果承認された。細則に基づき全理事の投票を行うこととした。

7. パソコン通信に会員名簿を公開することについて

- ・公開することの是非について審議が行われたが、賛成多数で了承された。

編集後記：この後記を書いている今は、うっとおしい梅雨の真っ最中だが、この号が出る頃には、8月の太陽がまぶしい盛りではないだろうか。

8月と言えば、昨年開始したつくばの高層気象台での有害紫外線（スペクトル）観測結果によれば、1年中で最も地上到達量（月平均日積算量）の多い月であった。太陽高度の高い、6、7月より8月の方が多かったのは、6、7月が梅雨期の曇天による減衰を受け少な目になったこと、及び6、7月の方がオゾン量が多くこれによる減衰のためさらに少なくなったことが原因と思われる。今年を含めて将来の推移が近年のオゾン層問題の中注目される。

ところで、紫外線観測を開始する契機ともなったオゾン層問題ではあるが、世界各国での数十年にわたる地道な観測の積み重ねがあってはじめて、南極オゾンホールをはじめ、近年の異常の検出が可能となったのではないだろうか。継続的定常観測の重要性を示す一つの見本と思われる。

オゾンや紫外線、二酸化炭素をはじめとしたいわゆる地球環境の変化の監視には、根気強く精度を維持しながら観測を行っていく必要があるが、そのような努力が現在各方面で多種多様に払われ、着実に成果が蓄えられている。『天気』誌上にそんな成果が息長く掲載されていくことを期待したい。（下道 正則）